

ニセフォール・ニエプスの写真術(1)― 再現実験と言説分析

大阪芸術大学 文芸学科 教授 青山 勝

【研究の目的(概要)】

本研究は、2020(令和2)年度以降3年間継続してきた研究課題「フランスにおける『写真術の誕生』とその現代的意義」の成果を土台に、ニセフォール・ニエプス(1765-1833)の写真術に焦点を絞ってその発展過程の全貌を総合的に解明することをめざすものであり、その柱は、(1)ニエプスの写真術の再現実験をさらに推し進めること、(2)ニエプスの写真術をめぐる言説の分析を、当時の社会的・歴史的コンテキストとの関連において行うことである。

初年度である2023(令和5)年度は、(1)ニエプスの〈太陽印画法〉の再現についていくつか残された課題に取り組むとともに、「フィゾトタイプ」という別種の写真術の再現実験にも着手した。ただし、時間的な制約からこちらについては特に大きな成果を得るには至らず、次年度にむけて機材等の環境整備を行う程度に留まった。他方、(2)1827年前後に急速に進んだニエプス自身による「太陽印画法」の言語化作業の追跡と分析は、一定の精度をもって遂行し、論文としてまとめることができた。これが今年度の研究の最大の成果である。

加えて、2023年3月には、「カメラを使って自然を写した、現在知られている限りにおいて現存する世界最古の写真」とされる《(無題の)眺め》(1827年)を所蔵するテキサス大学ハリー・ランサム・センターを訪問することができた。センターには、いわゆる〈ゲルンシャイム・コレクション〉が収められており、いくつもの貴重な資料を見ることができた。その調査を踏まえて、今年度はゲルンシャイム夫妻が《眺め》を再発見し、公開するに至る経緯等についても批判的な検討を加えた。今後その成果も公表していきたいと考えている。

【今年度の主な研究成果について】

①ニエプス関連の原資料の再検証

今年度もニエプス関連の原資料(書簡類)を再検証する作業を丁寧に進めた。

私が特に注目してきたのは、1827年にニセフォール・ニエプスが兄クロードを訪ねてイギリスを訪れた際に急速に進められた太陽印画法の概念化の過程、なかでも「自動性」の概念の出現についてである。

この「自動性」の含意を探るために、私は昨年度後半から、ピレオロフオールにかかわる資料の再読と点検を集中

的に行ってきた。ピレオロフオールは、1806年にニセフォール・ニエプスと兄クロード・ニエプスが共同で特許権の申請を行った機械で、現在では「世界初の内燃機関」として再評価が進んでいる。このピレオロフオールに関連して「自動的」という言葉がどのように使用されていたかということにまで遡ったうえで、1827年に突如として写真術について使用されるようになるこの「自動性」の概念の含意を探った。この研究の成果の一部を、「内燃機関と写真術―ニセフォール・ニエプスの『自動性』の概念について」(『美術フォーラム21』47巻、2023年6月)という論文にまとめ公表した。

②〈ゲルンシャイム・コレクション〉の調査

先述した通り、私は2023年3月にハリー・ランサム・センターを訪問し、〈ゲルンシャイム・コレクション〉のうち主にニエプスに関係する写真作品や資料の調査を行った。現在ハリー・ランサム・センターでは、《眺め》が、グーテンベルクの聖書と並んで最も重要なコレクションとして常設展示されているが、この貴重なニエプスの写真を1952年に「再発見」し、「世界最初の写真」として発表したのが写真史家のゲルンシャイム夫妻であった。彼らのその後の精力的な活動が、ニエプスの写真史上の位置づけを大きく変化させたことは間違いない。

「再発見」の約4半世紀後の1977年には、その経緯についてヘルムート・ゲルンシャイム自身が「写真生誕150周年」という記事で詳述している。また、《眺め》を含む〈ゲルンシャイム・コレクション〉が1964年にテキサス大学によって獲得された経緯についても、ハリー・ランサム・センター発行のカタログなどに詳しく記載されている。今年度は、そうした記述を参考にしつつ、〈再発見〉以来現在にいたるニエプス(および《眺め》)の歴史的評価に関する言説の変化を辿り直した。現在、ハリー・ランサム・センターの写真部門の首席学芸員であるジェシカ・S・マクドナルドの論文(A Sensation Story: Helmut Gernsheim and “the world’s first photograph,” in *Photography and Its origins*, T. Sheehan and A. M. Zervigon (ed.), Routledge, New York and London, 2015)なども参照しながら、今後さらに現代のニエプスの評価について考察を深めていきたいと考えている。